

開会 午後 4時20分

◇議員会長 模擬議会に引き続きまして、議員研修会という形で講演会を開催することになりました。大変お疲れのこととは思いますが、模擬議会のほうにも高橋先生には参加していただきました。いろいろ感想も講演の中で交えてお話があろうかなと思っております。今事務局のほうからもお話がありましたように「ふるさと回帰運動と地域活性化を考える」ということで、資料もお手元に配付はされていると思います。

講師の先生であります高橋先生におかれましては、NPOふるさと回帰支援センターの常務理事及び事務局長ということで、高橋公さんというお名前でございます。愛称と言ったらあれなのですが、ハムさんという愛称で親しまれております。この資料の裏側に高橋先生の経歴等が書かれてございます。簡単にかいつまんで申し上げますと、1947年に福島県相馬市にお生まれになったということでございますし、その後労働運動のほうにお進みになって、そして現在の役職と、こういうふうになってございます。役職等については、ここに書かれているとおりでございますが、食糧・農林漁業、環境フォーラム幹事、地球温暖化防止活動推進センターの運営委員、内閣官房再チャレンジ「暮らしの複線化研究会」の委員、国土交通省二地域居住検討会委員、株式会社ふるさと回帰総合政策研究所代表取締役社長、さらにアジア農民元気大学教授、それからこれは特技であり、特異性がございますね。すばらしいと思うのですが、神道夢想流杖道というのですか、5段の腕前だそうでございます。

以上、簡単に講師の高橋先生の紹介にかえさせていただきます。よろしくお願いいたします。

◇高橋先生 どうも皆さん、こんにちは。大空町に来たのは2回目なのです。2年前に来ました。北海道にNPOで北海道ふるさと回帰支援センターというのがあるので、札幌に。そこの方々が道内4ブロックぐらいに分けて、それぞれ自治体の関係者にお集まりいただいて、ふるさと回帰運動とは何ぞやという話をしに来たのが初めてです。もう2年前の夏でしたか、そんな感じでして、ずっとこの辺列車で移動して、北海道を初めてほぼ1周したような感じになりまして、女満別空港には時々来ているということなのです。実は、私どものふるさと回帰支援センター理事長が作家の立松和平さんなのです。彼が知床に毘沙門堂をつくっていますよね。そこに私時々来て、6月の一番最後の週の土曜日ですか、毘沙門祭をやっているのです。そこでいろいろと皆さんで地元の人たちとお酒を飲んだりして交流したり、あるいは毘沙門祭ですから、京都仏教会の金閣寺の有馬先生とか、それから法隆寺の貫首とか、中宮寺の門跡さんとか、そういう日本仏教界の主だった人がなぜか6月の一番最後には知床に集まって、いろいろとお祭りをやって国の安寧を祈っているというようなことをやっています、そんな感じでよくここに来ていて、去年かな、また行くつもりなので、もしあれだったら、立松に寄ってここで少し簡単に文化講演会か、ふるさと回帰運動の話でもしてもらおうかという話を事務局のほうにお願いしていた経緯もあったのですが、そのと

きはちょうどうまく日程が合わなくてできなかったのですが、そんなこんなでということです。きょうは、土曜日なので、しかもこの時間でこんなに皆さんお集まりいただきまして、議員の先生方、それから稲城の市議会の方々も見えているようで、本当に私が果たして皆さん方のご期待にこたえるだけの話ができるのかどうなのかという、若干心もとないところはあるのですが、しかしふるさと回帰あるいは移住の話で模擬議会までやっていただいたということでもありますので、何とか気持ちを込めて町長さんの話からいうと愛を込めて話をしたいというふうに思っています。

僕は、先ほども紹介ありましたが、福島県の浜通りの出身です、漁師のせがれで。中学校まで福島にいまして、高校は家庭の事情で横浜に行きまして、大学は東京ということになります。なぜこの運動を始めたのかということなのですが、実は率直に言うと自分が田舎に行きたかった、帰りたいということなのです。昭和22年の団塊の世代ですから、当時私の同級生の半数以上ですか、やっぱり3月になって卒業すると集団就職列車に乗りまして、それで東京や川崎や千葉に上京したという感じなのです。かつて「ああ上の駅」という歌がはやりましたけれども、僕らはもうまさにあの世代なのです。相変わらず新宿で時々酒を飲んでいますが、そうするとやっぱり「ああ上の駅」なんていうのをカラオケでやったりして昔を思い出したり、いろいろしています。自分が帰りたいから、自分がふるさとに戻りたい、そういう気持ちがあったからこういうことを始めたのです、きっかけは。始めたのが98年なのです。ことし2008年ですから、10年かかりました。当時は、そんなにふるさと回帰とか、田舎に帰ろうとか、田舎で暮らそうなんていうのはこんな感じになっていなかったです。一般的に田舎に帰るといって、何かある種志を立てて東京に来たけれども、失敗して、道半ばで田舎に帰ると。何となく後ろめたい思いもとかいうのが結構あったのかなという感じはあったのです。でも、そんな状況ですけれども、最近は大分違います。実は、その100万人の回帰運動というのがある程度定着した。そのことによって、そうでなくなったという感じあるのかなというふうに思います。

最近、普通の人々が普通のこととして田舎暮らしを楽しむということになりつつあるのです。2年前に大空町にお邪魔したときには、まだ運動がこんなに盛り上がっていませんでした。今きょうこの模擬議会を聞きながら、ちょっといろいろと当時のこと、2年前のことを思っていたのですが、あれ夏にやって、それで帰って、9月にふるさと回帰フェアというのをやったのです。きょうお手元に情報誌配付させていただいています。ページめくりますと、ここにふるさと回帰フェアとありますね、特集号なのですが、2年前の2005年には、実はこれ始めたときには全国で48の自治体が参加したのです、大手町で。48でもまあまあ集まったなという感じで、参加したのが8,500人ぐらい参加したのです、延べで。そうしたら、その翌年、おとしはどのぐらいかという、実は35県101の自治体が参加したのです。これでざっと1万5,000人ぐらい集まりました。去年は42県240の自治体が集まったのです。東京で延べ2万人。去年から大阪でもやってくれというので、大阪でもやりました。大阪で

は8,500人ぐらい集まりました。倍々ゲームでふえているという状況なのです。それだけ田舎暮らし、ふるさと回帰が定着して、実は去年の場合は会場の大手町の農協ビルの隣の産経新聞の前の広場を中心にあの一带を歩行者天国にしてやったのですけれども、結局会場が狭くて入りきれないというので、幾つかの自治体を参加お断りしているのです。ことしはどこでやろうかということで、いよいよ有楽町の国際フォーラムありますよね、大きなところ。あそこでやろうというふうに今計画しています。参加自治体は350自治体を展望しています。350自治体ぐらいでもう打ちどめだろうなど。それ以上ふやしてもちょっと面倒見切れないというようなことで思っていますけれども、あとはもう勝手に動き出すのではないかなというふうに思っています。先ほど言いましたように、こういう国民的な運動になってくるといって、やっぱり5年、10年かかるなという実感はあります。よく言われるでしょう。簡単にできるものというのは簡単に壊れるのです。ところが、やっぱり5年、10年かけてじわっと下から積み上げていくやつというのは、これは簡単にはつぶれないのではないかなというふうに思っています。

それで、そういう自治体、うまくいっている自治体とか、失敗した自治体とか、結構事例集まっています。結論から先に言うと、やっぱりふるさと会ってうまくいっているところはどういうことかということと人がいるところなのです。人がいるところ、私どもはコーディネーターと言っているのですけれども、田舎に帰りたいたいという人と受け入れたいという人、これをうまくつなぐ、それをやってくれる人がきちっといるということ、これがやっぱり一番大事ななというふうに思っているところであります。去年の場合は、実は倉本聰さんに来ていただきまして、僕は倉本聰さんは初回からぜひ呼ぼうと思っていたのです。早い段階から北海道に来て暮らしておられると。倉本聰さんを思い出すと、イコールで僕は大空町を思い出すというの。忘れていたのですけれども、そのときだれかに聞いたのだよね。倉本さんもももとは女満別に来たかったということなのです。電話したと、女満別に。そうしたら、なかなかうまく気分が合わなかったというのですか、何かまじめに取り上げてもらえなかったというのか、サービスが足りなかったというのか、きょう幾つかテーマで移住された人からああしてほしい、こうしてほしいという率直な意見出されて、僕は非常に参考になっておもしろかったなと思っていましたのですけれども、そのときうまく対応できずに断念して倉本さんは富良野に行ったということで、この間、去年の夏倉本さんと会ったときにそういう話をコーヒー飲みながら、そんな話もうわさで聞いたけど、どうだったのですかと聞いたわけ。いや、そんなことはないよというふうには言っていましたけれども、でもやっぱり僕は女満別全然悪い印象持っていないし、いいところだと思っているのだよねというような話で言っていて、しかし彼も年も年なので、そろそろ引き揚げて東京に戻りたいかなと、戻ろうかなというようなことを言っていました。そういう意味でもやっぱり彼自身が何で女満別なり、あるいは富良野で住んだかということというのは非常に大事なことだと思うのです。

先ほど言いましたように、私は自分が田舎で暮らしたいみたいなことを言った

けれども、本当の話はそれもさることながらもっと別の話があるのです。なぜかと。これは、戦後63年たって、日本が世界に冠たる経済大国になったでしょう。豊かになったと言われたでしょう。今どうなのということなの。元旦の日経新聞一面記事には、GNPが世界で13番目というようなことになったということで、落ち込んでいるというふうなことがあって、最近余り日本という国はいい話聞かないのですけれども、しかし今振り返ってみても昭和というのか、1980年代はやっぱり世界に冠たる経済大国、それはアメリカをもしのぐというふうに言われていたぐらいの勢いのあった時代があるわけです。そういうふうな歴史をたどってきたけれども、果たして一人一人の日本人って豊かだったのということなのです。人間って一体何のために暮らすのだろうと。何のために生きるのだろうと。日常生活の中では、結構忘れがちなことなのだと思うのだけれども、ふっと我に戻ったときにそのことを思うときってあるではないですか。私も還暦迎えて、あるいはこの運動を始めようと思ったときに、50になったときに男50にして立つという孔子の言葉あるけれども、そのことを思ったときにこれでいいのかというふうに思ったと。そのときにこれはまずいと。やっぱりみんなが豊かさが実感できるような国なり暮らしになっていないねと。こういう豊かさが実感できるような、幸せだなと思えるような暮らし、生き方、これをもう一回日本人取り戻さないと、日本という国は大変なことになるぞということを思ったのです。ちょうどその後私もアンケートをやったのです、東京と大阪と名古屋で、いわゆる3大都市圏で。このアンケートをやったら、何と4割の都市住民が条件が許せば田舎で暮らしたいと答えたわけです。そうすると、私だけが思っているのではなくて、多くの都市住民がやっぱり田舎で暮らしたいと思っているのかもしれない。だったら、その人たちにうまく田舎暮らしができるような、そういうシステムをつくったら、これはきっといいのではないかというふうに思ったのです。

それで、当時10年前この運動を始めるときに、これは大変なことになるというふうに思ったのですけれども、今ここにきてまさに大変なことになっているでしょう。年金、食べ物、それからいろんな法律の問題、国策捜査なんていう話があったりして、司法制度もがたがたになっていると。もう希望がない。これはどうなのかということ。やっぱり物質的に豊かになるために、経済的に豊かになるために、もしかしたら日本人というのはつま先立ちでこの間頑張り過ぎてきて、希望も夢も愛もふるさとみんなほかはだめにしたのではないかということを書いてならないのです。例えば教育もそうでしょう。きょうも教育の話質問に出ていましたけれども、教育というのはよく言われるように国家百年の計だと言われているではないですか。ところが、今どうなっていますか。ゆとり教育の寺脇研という、いらっしやいますでしょう。文部省の審議官をやっていたり、きょう新聞に載っかっていたよね。あれ朝日新聞かな、何新聞かな、きょう朝空港で読んだら載っていました。来年から少しカリキュラムが変わって、子供たちの授業日数が多くなるという話でしたけれども、それに対して寺脇さんがコメントしていたよね。自分のゆとり教育というのは誤解されていると。私は、別に勉強しなくていいなんていうことを言っていないよと。勉強というのは、上から押しつけら

れるものではないと。子供たちが学ぶということ、何のために学ぶかということ、そのことを自分自身で考えて、そして勉強する、学ぶ、そういう姿勢を持っていくということ、これが一番大事なのだと。それがないと、人間としては非常にゆゆしき事態になっていくというようなことを彼は言っていたのですけれども、僕はそういった意味で寺脇さんがああいう形で文部省を放逐されたことは非常に心外だなと思っているのです、本当。彼は、やっぱり誤解されている。ああいう形で真摯に日本の教育をとらえ返そう、詰め込み教育ではなくて考える力を身につけると。暮らしていく、暮らしに役立つような、きょうも話出ていたけれども、特別教育というのですか、要するに実践、現場に出て行って体験、いろんな自然と向き合うとかなんとかというのは、やっぱりゆとり教育の中で話が出てきているわけですから、その辺もう少し評価されて、詰め込みだけじゃなくて生きる、暮らすということがトータルとして教育の中でやっていかれるほうがいいのではないかななんて私は思ったりしてしまっていて、でも個人的にも僕寺脇さんとは親しいのです、人間的にも好きだし。そんな感じで、彼は知っていると思いますけれども、日本映画の評論家としては一流なのです。文部官僚だけではなくて、日本映画については物すごく造詣が深く、よく映画評論とかに映評を書いたりして、すごく官僚としては珍しいぐらい幅広の、ウイングの広い男なのです。そういう人だから、ああいうゆとり教育みたいな発想が出てきて、それでああいう政策が固められていくということなのだろうと思うのですけれども、話は横道にそれましたけれども、そんな感じで教育もそういうことになっていると。

それから、七、八年前ですか、教育のだめさの一つの典型ですけれども、三菱重工の長崎造船所です。最近やっている豪華客船、クリスタル号とかなんとか、あれ13万トンぐらいの豪華客船で火事が起きたでしょう。2そうつくっていて、1そう燃えた。その後新日鐵名古屋工場で大きな爆発事故が起きた。それから、苫小牧では出光が石油、これも事故を起こした。リーディングカンパニーが立て続けに事故を起こしたのだよね。このときは、私は実は当時連合に行っていましたから、連合というのはそういうリーディングカンパニーの組合の人たちなので、みんな優秀なのが集まって意見交換、議論しているわけです。それで、三菱重工の長崎造船所の話聞いたわけです。どういうことになっているのだと。ちょっとやっぱり何かどこか問題あるのではないのかという話をしたら、その彼はこれはCIAの陰謀かというようなことを言っているわけです。そんなことはないだろうとかと。いや、どうもおかしい、原因がわからないとかいう話になって、あんな大ごとになっているのですけれども。結果、どういうことにだったのかというと、危機管理ができないと。要するにマニュアル人間。こうなったときにこう対応しろと、こういう想定される危機に対しては強いわけです、マニュアルは。ところが、想定外の事故とか、そういうことが起きたときに対応できなくなってパニックってしまって、人間としての総合力というのですか、判断が結局できなくて、それでやっぱり日本のリーディングカンパニーが偶然なのでしょうけれども、ああいう事故を起こしていくと。ここにやっぱり日本の産業の危うさというのを一瞬見たような気がしたのですけれども、そのことが克服されているかといった

ら、僕は決してそうではないなというふうに今思っているところでもあります。いずれにしても、そういうことで物質的豊かさを追求することのみ奔走しておいて、そういうトータルの人間本来の豊かさ、幸せ、そういう幅の広い愛情の豊かな人間がなかなか育っていないと。国というものがサステイナブルというのか、持続可能な形になっていないのではないかとというふうに思っているわけです。

ついでに脱線して話をしますと、最近格差社会と言われているでしょう。勤労者の4分の1が200万円以下の賃金だと言われているわけです。なぜそうなったのかというと、要するに利潤を追求するがゆえにそこで働く労働者を不安定雇用職員というのか、臨職、非常勤を大量に入れて、それで働かせると。そういう人たちが年収200万円ぐらいで働いているということの格差社会と。それは、どういうことかということ、やっぱり職安法を実は20年前ぐらいに改正しているわけです。私は、先ほど紹介ありましたように自治労という地方公務員の組合にいまして、その職安法の担当をやったのです。それで、労働省と職業安定法の改定問題について激しいやりとりをして、そういうことをやったら必ずこういう事態を招く可能性があるぞと。資本の論理からいったら、労働者を安く雇う、そのことによって利潤を上げるというのは、それは常套手段でかつてもやられてきたと。だから、労働組合ができた、これが歴史の必然だったのだから。安易に職安法を変えて、それで派遣を簡単に認めるということは安上がりの労働者ということになっていくと。そうしたら、結果、企業体質が弱くなって行って、持続可能な形でその企業が成長することはできなくなると。総合的に5年、10年先の企業、国という形も一緒ですけれども、それを考えたときに、そういう安易な安かろう、悪かろうというのは国にとっても企業にとっても絶対よくないというので、激しくやりとりしたのもかすかに覚えているのです。それが結果としてあつという間にこういう社会をつくった。日本というのは、自民党と社会党がいろいろあつてやってきて、そこそこいい感じでやってきて、アメリカとかヨーロッパに比べても貧富の差がなくて、ある種ゾーンの中におさまっていて、それで社会保障も、きょう医療の話とか介護の話出ていましたけれども、やっぱり世界に冠たる状況をつくってここまで来た。それがあつから、これだけ経済的にも進んだというの。お互い裏腹の関係で、トータルとしてのクオリティーの高い社会ができたというふうに思うのですけれども、そんなことをいろいろ考えたりしておりますけれども、そういうことになっていると。そういうことなのです。

ただ、そういうことの中で改めて100万人のふるさと回帰運動というのか、団塊の世代を中心に田舎で暮らそうという動きが出てきたということは、非常に僕は大きいなと思っているのです。どういうことかということ、団塊の世代、要するに地方が高齢化している。過疎化をしている。幾つかの原因あるけれども、その大きな原因の一つは680万人と言われている団塊世代がかつて60年代、70年代に、先ほど紹介しましたように僕の田舎福島あたりでも半数以上、6割ぐらいは中卒か高卒で集団就職列車に乗ってきた世代なのです。この680万人、このうちの50%の人たちが今でも先ほど言った3大都市圏に進んでいるのです、東京、大阪、名古屋圏に。このうちの4割の人が条件が許せば田舎で暮らしたい、

田舎に帰りたいと、こう言っているわけです。その人たちをうまく、帰りたいのだったら帰りたいところに帰れるようなシステムができれば、当然各地方自治体の過疎化に歯どめがかかるのではないかとということで、今これをやっているわけです。僕よく言うのですけれども、団塊の世代というのは日本の地方が、大空町もそうだと思うのですが、団塊の世代が子供だったころ、合併する前の女満別もそうだと思いますけれども、どうでしたか。やっぱり地域には人があふれていたのではないですか。勢いもあった。地域が輝いていたのです。戦争に負けて、お父さんたちが帰ってきて、それでやっぱりでは日本をどうしようかと。将来に夢があったのです。この団塊の世代、やっぱり地域が輝いていたことを知っている最後の世代なのです。今の女満別の状況も知っているわけです。この落差も知っているわけです。この680万人の団塊の世代が東京で経験したこと、学んだこと、そういったものを年金と退職金と一緒に女満別に帰ってくれば、その落差に驚きながらも、おれだったらこうしたらいいのではないか、ああしたらいいのではないかということにつながって、地域活性化の役割を担うことになるのではないかと、そういうことなのです。だから、重要だということを私は申し上げているのです。きょうも女満別空港に季節の花を飾ったり、流氷を飾ったりしたらどうなのですかという、まさにやっぱり移住者の目線での提案でした。地元にいる人はそれが日常なので、そんなものだと思ってるのだから。だから、地域活性化とか、やっぱり女満別の再生、大空町の再生というのは自分たちだけではなかなか難しいのです。人間というのは弱い。毎日同じことをやっていればそれが普通になってしまうから。ところが、新しい血が入ると、これ違うのではないのと。例えば毎日飲んでいる水だって、東京で飲んでいる水と女満別の水とは違うと私思うのよね、まだ飲んでいないけれども。うまいと、こうなるわけです。これが売りなわけです。だから、地域活性化するためにはどうしたってよそ者の目線があるよと。だから、新しい人を、帰りたい、田舎で暮らしたい、大空町で住みたいという人いるわけだから、きょうもたくさんお見えになっていましたけれども、この人たちをうまく引き入れて、そしてその人たちの知恵をかりながら議論して、それで女満別をどうするかという話になっていくと、これはおもしろい展開になっていくなというふうに思っています。

先ほど冒頭紹介しましたように、2年前と比べたら今状況は本当に変わりました。実は、きょうも東京で福島県のフェアをやっているわけです、農協ビルで。これに何と400人を超える人たちが集まっています、福島に帰りたい、福島で暮らしたいという人が。ゆうべ福島県の石川地域といって阿武隈山地の山の中のまちが5つ集まって、それでセミナーを開いていました。我がまちはこういうところですよ。温泉がある、川が流れている、寒いところだ、そばがうまいとか、5つの地域さまざまです。でも、それが一緒になって集まってやったら、やっぱり30人を超える人たちが集まるわけ。先週もやったのですけれども、先週も入り切れないぐらい。これは、福島県のこれまたいわき市がやったのですけれども、入り切れない。その前が新潟県上越市がやった。毎週のようにやっているのです、セミナーを。去年は、これ集めるのに四苦八苦した。ところが、最近はホームペ

ージに対するアクセスも急増していますから、もうコンスタントに集まってくるわけです。そうしたら、何も聞いたら福島県出身ではないのです。全然関係ない人のところまで来て、それで福島の地酒を持ってきて地酒飲みながら意見交換していましたが、そういう感じになってきたと。銀座に情報センターを去年の4月から本格的に開設しているのです。そうしたら、大体毎月、ことしに入ってから月に150組ぐらい来ています。電話の問い合わせも同じぐらい。ホームページのアクセスがやっぱり日に5,000から6,000件ぐらいのアクセスというようなことになっています。そういう感じではじわっと広がっていると。何でそうなっているかという、最近の中国の毒ギョーザの話も含めて食べ物の問題とか、それから治安も悪くなっているでしょう。何か殺しなんていうの、毎日そんなニュースばかりですから、これどうなっているのだと思っていますけれども、そんなこともあって、だったらもう少し時間がゆっくり流れているふるさとでということはずっとあるのではないかな。そんな感じで、若いうちは東京で勉強し、働くのもいいと思うけれども、しかし定年退職後はやっぱり大空町で住むぐらいの感じになっていくと。子育ての話もありましたけれども、絶対子育ては東京はそれはなかなかつらいです。子供たちにとっても魚というのは切り身で泳いでいるのではないかと思ったりしているし、そういうのを知らないわけだから。それはそうですよね。あのマンションでしょう。高層マンションだって20階、30階建てマンションを最近ばかばか建てているけれども、ああいうところに住んでいて、それでスーパーに行ったら何でもあるわけでしょう。それは異常なことなのです。自分の食うものとか、自然の移ろいとか、そういう情操教育というのですか、自然に触れ合うから人間が豊かになっていくわけです。それがなくてコンクリートの中で暮らすということというのは、人間にも非常にやっぱりよくない。

これ私の極めて親しい友人がいて、彼がよく言うのですけれども、マツタケと総理大臣は山からとれるというようなことをよく言うわけです。この男は、国土交通省の次官級審議官やって、今地域活性化統合本部というのが新しくできたのご存じでしょう、自治体の関係の方は。前地域再生本部とか、あるいは都市再生本部というのありましたでしょう。それが全部廃止になって地域活性化統合本部という福田内閣の肝いりの大プロジェクトがスタートして、その事務局長やっているのですけれども、彼をこの間呼んで勉強会やったのですけれども、そのときに彼が紹介したのはそういうことを言っていました。マツタケと総理は山からとれると。やっぱり子供は自然環境の中で育てる。そういうことになると、その子供がやっぱり視野が広くなり、人に対する優しさとか、いろんなことが醸成されるということで、そうすると地方で受け皿さえできてきちっとした環境さえつくれば、やっぱり子供のうち、中学校ぐらいまでは地方で、高校も地方でもいいと思うのだけれども、それで大学だとなかなかあれなので、では東京でも行くかというようなことでよろしいかと思うし、子供たちも昔みたいに中位から頑張っ、それで進学校に行ったら東大に入ったら幸せな人生が約束されるかと思ったら、そうではないから、今は。従来の日本の雇用形態、終身雇用という制度は完全に崩壊しているわけだから。求められるのは、やっぱりバランスのいい人間なので

す。総合力のある、危機管理のできるやつ。詰め込み教育が幾らできたって、それは社会の中で使い物にならぬわけです。それは、僕ら団塊の世代になると僕らの友人たちも結構会社の取締役とか、そういうの結構多くなっているけれども、やっぱり最近どういうやつ雇うのだといたら、それはもういい大学はだめだと。やっぱり体育会系の、誤解なく聞いてほしいのです、日東駒専とか、そういうところのほうがずっと使い勝手がいいのだというようなことを言っています。それで、やっぱり体鍛えたあいさつのできるやつがと。そうではない詰め込み教育へ行って進学校に行ったようなやつというのは、もう使い物にならぬということを行っていますけれども、そういうことまでできてしまっているということなので、そういった意味では子供たちも自分の一生をどう生きるかと、どう暮らすかというようなことを自然に向き合いながら考えるみたいなことってすごく大事だし、そういう観点からもこの回帰運動というのは非常に大事になってくるのだろうと私は思っています。ぎりぎりのところで、もしかしたら徳俵かな、すもうでいうと。徳俵に足がかかったところで、もう一回それぞれがどういうふうにして暮らすのか。大空町がどんなふうなことになっていくのかということを考えたら、これはおもしろい話になっていくのだろうというふうに思っています。

このふるさと回帰を成功させるためにも幾つかの条件あるのですけれども、これは前から言っているのです。一つは、やっぱり受け皿をつくるということ。というのは、ある日突然大空の町に来て友達もいなかったらやっていけないものね、寂しくて。私どもの経験からいうと、独身、一人で来た人は余りうまくいかない。夫婦で来る人は結構うまくいくケースが多い。だから、私どもの銀座の情報センターに相談に来る人、一人で来る人は余り見込みないぞと。行っても2年か3年で寂しくて帰ってしまうケースが多い。夫婦で来るような、奥さんを連れて来るような人、これ脈あるぞという感じになります。ですから、そういった意味で受け皿の組織をつくっていただいて、それでそういう夫婦で来る人にきちっと相談に乗る、これが大事です。ですから、一般的には縁もゆかりもないところにはだれも行かないですから。友達がいるとか、そういうことで一回行ったことある、本で読んだことある、聞いたことある、何でもいいのです。そういうきっかけがやっぱりすごく大事という。逆に言えば成功させるためには、そういうきっかけづくりをたくさんつくるといこと、発信をするといこと。さっきのエア・ドゥに機内誌に載せるのもすごくおもしろいと思うし。ふるさと回帰フェアに去年240自治体参加したけれども、僕忘れていてさっき確認したら、大空町参加していないのだよね。これは、やっぱり大きいです。という感じなので、参加料無料なのですからぜひ来てもらって、それでやっぱり参加すると。そういうことをすることがすごく大事です。

2つ目は、どういうこと大事かという、人は移住するには住む場所がいるのです。やっぱり住む場所をきちっとしなくてはいけない。きょうも町長がこういこと空き家の情報バンクをつくるか言っているけれども、そういう登録制度をつくるというから、それはいいだろうと思うのです。でも、速やかやる必要があるよね。既に早いところは、ホームページで全部やっぱりどういうところな

のか写真が入って、こういう条件でという一覧表につくって、それをうちのホームページにリンクして、それでという感じになっています。やっぱり空き家情報は非常に人気あります。というのは、大空に来てもうまくやれるかどうかわからぬと。しかし、お試し体験やってみたいということだと、だったら空き家だったら安く借りれるし、リスク低いということ。ある自治体によっては、大体50万円とか100万円ぐらいまでは、要するに空き家なんかは5年とか10年、10年なんかだめだから、もう。5年ぐらい使わないと大分傷むから、水周りを取りかえるとか100万円弱ぐらいでできるから、それを補助を出して、それで住んでもらうようにすると。月3万円で1年で36万円で、3年で100万円でペイすると。5年いてもらったら同じみたいな、こういう感じでやっているところが結構ふえていまして、そういうちょっとしたことをやっていくことが必要だと思います。

それから、先ほども話に出たサポーター制度みたいなものができたということですが、僕知らないよ、それ。私は、ふるさと回帰運動をやって、事務局長をやって、一応僕よりもこの状況について詳しい人はいないと思っているのです。できるだけ僕は足を運んで情報を全部見ているつもりだから、チャンスがあったらどんな忙しくても必ず顔出すようにしている。知らないということは、情報をどこで発信しているのですかということなの。そうでしょう。全部が全部自治体できているわけではない、そういうことが。大空町はできているわけだから、できているのだったら、大空町は移住者のためのサポーター制度できましたよと。顔写真でもつけたやつをこれまた発信するとか、うちに情報くれたら僕が紹介する方法考えるとかということになると、そういう一つ一つのことをやっていくと次の展開につながっていくということなのです。

あと、ホームページなんかつくったからこれでいいなんていうことではないです。ホームページつくるのが常識。まず、イロハのイ。そのつくったホームページをだれがどういうふうに管理するかということ。そして、どういうネットを張ってどこに向かって発信するかということが精査されていかないと、次の展開にはつながっていかない。そういう運動というのは、自己満足のためにつくるのではないのです。田舎で暮らしたいという人のところにぴたっと情報が発信されるような仕組みを考えるというふうになっている。そういう努力をするといいいのかなというふうに思っています。

そんなことで、あとはどうだろう。大体主にそういうことさえ気をつければと。そんな難しい話ではないのです。やっぱり北海道というのは、僕はすごく条件いいと思う。私どもの田舎暮らしのアンケートからいうと、ベストスリーというのがあるのです、希望者が多いというのが。ちょっと入れかわったりしているのだけれども、一応うちのふるさと回帰支援センターの情報ではトップはやっぱり長野県、2番目、北海道、3番目沖縄。4番目に、ここにきて福島県。福島県はどうかといたら、これは知事みずからが移住者受け入れをやりたいというので、県政の3本柱の一つに2地域居住を受け入れますというようなことを言っています。ですから、今同時並行で東京でやっているイベントにも知事みずからが来て、

それで旗振っています。こういうことが非常に大事になってくるのだろうというふうにも思っています。それがベストスリー、その下に千葉とか静岡とか、そういうところがずっとつながっていると。トータルからいえば、さっき言ったように運動が非常に定着してきているので、どこの自治体でもやっぱりふるさと回帰というのか、田舎暮らし、移住者がいる、もう。聞いたこともないようなところにもうちは3人来たとか、5人来たとか、十何人来たとかいう感じになっています。そういった意味では、運動が社会的に定着してきているなというふうにも思います。それにプラスアルファでもう少しということになれば、これシステムチックに今私が指摘したようなことに注意しながらやっていると、いい展開になっていくのではないかとこのように思います。

あと、もう一つは、去年団塊世代の定年が2007年問題と言われたように、去年から定年始まっているのですけれども、ご存じだとは思いますが、2006年に高齢者雇用促進法が改正されていますよね。ということは、おれもう少し働きたいという希望者は雇わなくてはいけない、これ義務化されていますから。連合の調査だと、団塊世代で60歳ですばとやめた人というのは2割。3割までいないです。ということは、3年先に先送りされています。ですから、2007年問題というのは実質2010年問題になっています。でも、いつか必ず、彼らは未来永劫そこにいれるわけではないですから、そういった意味で受け入れ態勢を整備しながらうまくアピールしていったら、すごくよろしかろうというふうに思います。

僕も知らなかったけれども、2年前に大空町に来たときに名前の由来も聞きました。僕は、いろんなところで大空町の話もするようにしているのですけれども、晴れているという、天気もいいところだし、どうも北海道で冬といったら何か雪ばかり降っていて寒いような気がするけれども、そんなことはないぞと。日照時間非常に多いのだぞという話をして、倉本さんの話もしながら、なかなかおもしろいよという話をしているのですけれども、今回そういう模擬議会をやってああいう決議を上げていただいて、僕はどこかでそれをちょっと原稿か何かに書いて紹介したいというふうに思っているのですけれども、願わくば前から言っているのだけれども、きょう議員の先生方もいらっしゃるけれども、一回市議会で正式に受け入れ決議みたいなものを作ったらどうかと思うのです。大空町ふるさと回帰というのですか、移住者受け入れ宣言という。サポーター制度もありますよと、空き家情報も空き家バンクが全部整備されていますよと。それから、病院もこうなっていますよと、介護もこうですよと、子育てもこうなっていますよと、教育だってこうですよという話をしてやったら、総合ビジョンみたいなもの、難しくなくていいと思うし、金もかからないわけだから。ということでやると、僕はアピール力あると思います。

実は北海道が最近明らかにした2006年の移住者のランキングというのは、皆さん、見ましたか。この間送ってきた「日経グローバル」という雑誌、日経新聞が出している地方の情報の雑誌があるので、これ私がちょっと取材に協力したので、そうしたらこの中に出ているのです、北海道の状況。北海道と

いうのは、ご存じのとおり北の大地への移住計画とあって団塊世代に焦点を絞って2007年、2008年、2009年か、それで各年1,000人ずつで3年間で3,000人、経済波及効果何千億円というのをはじいて話題になったのです。それで、結果どうなっているかという話がずっとみんな注目の的なのですから、これにこうあるのですけれども、2006年の移住者実績と。1番が函館なのです。25人。次が弟子屈が20人、当別町が19人、八雲が同じ19人、浦河が同じく19人、東川が13人、黒松内が11人と、長万部が10人と、小樽も10人、室蘭も10人と、こういう続いているという感じで、想定した数よりは少ないです。それは、さっき言ったような状況があるからなのです。ただ、今ランキングで名前出たところ想像つくのです。人もいるわけ、さっき言ったように。やっぱり首長も熱心なわけです。そういう感じで頑張っているところがきちっと出ている。それから、例えば体験移住ということで、移住するためにこういう体験したいというようなことなんかランキングで出ているのですけれども、中標津が何と58人で、延べ日数が746日ということになっている。中標津ってこの近くでしょう。僕あそこの首長知っているもの。東京で2回会っているもの。やっぱり熱心なのです。そういうことで、やっぱり露出しているという感じ。できるだけうちに来たらうちはこういうサービスをしますよというようなことで、サービスというのは金をかけるとか金くれるとかということではないと思うのですけれども、気持ちを合わせてこういう受け入れ態勢ができているということが非常に大事だろうというふうに思います。

ですから、成功する事例の一つの中には、やっぱり先ほど言ったように受け入れ組織つくるとか、それから議会決議上げてほしいとか、いろいろあるけれども、もう一つが住民合意なのです。住民合意、どういうことかということ、きょう私はそこに座っていて気持ちいいなと思っていたわけ。大体議会の傍聴なんて、国会もそうだけれども、上からしか見たことないよね。ところが、皆さんの議員の方々、町長さんと同じ目線で座っていると、この臨場感というの。思ったのは何でかということ、これ民主主義って手続だなと。これが大事だなと。だから、模擬議会ってすごく大事だなと思うのは、議会というのはよそごとではない、自分のことなのだ。みんなが議会に参加するとか選挙に行くとか、あるいはみんなが大空町をどうするかということや議論する、考えるということはすごく大事だと思う。そのことが住民合意ということなのです。うまくいっている自治体というの幾つかあるのだけれども、そういうところは地区別に懇談会を開いたり、これやっています。複数の役場職員を張りつけて、Aという地区はだれだれと。それで、それぞれ提案をしてもらおうと。どうしたらこの地域が活性化するかと。大して知恵が出るわけではないのだけれども、そういう議論をしたということが次のステップにつながっている。町長さんが言ったのかな。この町という言い方は何かちよつとだと。私の町ではと、こう何で言ってくれないのかという話だったが、そういうふうなところで住民懇談会とか、そういう議論する場に参加すると、やっぱりこの町なんていう評論家みたいなことは言えなくなるわけです。これはおれの町だと。おれの町だったら、どうすればいいかということ。おれの町だっ

たら、町歩いていてごみがあったらちょっと拾って帰ろうとか、子供がそこでたばこ吸っていたらどなりつけて、こらと言ってやめさせるとか、それからあと子供が道草食っていたら、小学生が。気をつけて帰るのだよと、その一言がやっぱり地域を変えるわけだよね。それは、自分の町だと思うからそうするわけだ。大空一家みたいな形になるわけではないですか。こんなふうなことが日常的にうまく意見交換なり合意形成ができていくと、これすべてうまくいくと思う。だから、戦後63年たって日本がだめになった例をさっき言ったけれども、そういうことなのです。ですから、地方分権、市町村合併、そういったこともどうだったのかということをやっぱり思うわけ。おれの国、おれの町という意識、これが持てなくなったときに国というのは崩壊していくのだ。地域もそうだ。だから、逆に言えばやっぱり東京なんかは危ないというのは、それはそういうことが起きているからだよね。東京をふるさとだと思う人って少ないでしょう。それは、東京は戦場です。勝った者が勝ちということ。それには優しさもないわけ、潤いもないわけ。戦場に行って自分が武装して生きているわけだから、人には心を許さない。いいか悪いか別。それやらないと、なかなか勝ち抜けないということもあるけれども。

そんなこんないろいろ思うと、やっぱり60歳になった。60歳だから思える部分ってあるのかもしれない。僕は、団塊世代のネットワークを13年ぐらいずっと継続しているのですけれども、最近の僕らの仲間のテーマはやっぱりもう一回地域に帰って、それで一遇を照らす。かつてのように世の中こうしようとか、そうほらも吹くのもいい、若いうちは。でも、60歳になって残りは短い。そうしたら、やっぱり自分のポジションをしっかりと踏まえて一遇を照らすという意識で生きようよというふうに言っています。ですから、移住者を受け入れるときもそういう意識大事だ。だれでもいいから来てほしいというのではだめだと思う。例えば成功している例で、和歌山県的那智勝浦町の色川地区というの、結構有名なところがあるわけ。住民の3分の1は移住者なのです。そこに評判高いから、たくさん人が集まっているらしいというので、見学者とか体験したいという人いっぱい来るらしいのです。全部受け入れているわけではないのです。受け入れるも何もまずあなた、ここに来て3カ月住んでみなさいと。まず、面接して気に入らなかったら、どうもあなたは我が地域ではちょっとうまくやれないから、ほか探したほうがいいですよと言って断ってやっているらしいの。これはよさそうだなと、うちの仲間に入れたら戦力になりそうだと。おもしろそうなやつだとか、力持ちだから重い物を担げるとか、何でもいいのです、それ人間の取り柄は。一流大学を出ているだけが意味あるなんていうの全然ないわけだから。だから、それ人間さまざまだから、いろんなやつがいるから。それで、これはいいなど。この人間うちの地域に必要ななどというやつは、ではと言って、安いところあるからちょっと体験してみろと。3カ月ぐらいそこに住んでもらって、みんながチェックかけているらしいのだ。みんな集まって、その人とは別に集まって、世話人だけ集まって、あれはどうだ、マルかペケかと言ってペケにするかとかマルにしようかと。そして、受け入れると、こういう感じ。そうすると、選ばれたほうもそ

うかといって意識が高まってその気になってという感じで、その辺は結構やっぱりハードル高くしてもいいと思うのです。自分たちの地域なのだから、よそ者に来てならされる必要ないわけです。妥協する必要ない。という感じでやっていけば結構おもしろいことになっていくということだろうと思います。そんな感じで、先ほど言ったように初めて10年で成功事例、失敗事例たくさん積み上がってきました。もうちょっと積み上がったら、これを一つの事例集にして次につなげようかなというふうに思っています。

それから、もう一つ、これ日本でこうなったでしょう。何と最近韓国からの訪問がすごく多いのです。韓国もソウルに一極集中なのだと。地方はすごく過疎化しているのだと。何で日本はふるさと回帰運動みたいのできているのですかと毎月のように韓国の自治体の方が私のところに話を聞きに来るのです。彼らは、熱しやすく冷めやすいから。誤解なく聞いてほしいのだけれども、一般的にそう言われています。だから、反応が早いです。結構勉強して帰って、どうなっているのかなと思って。今度韓国に来てくださいなんて招待されているけれども、どうするかと思っていますけれども、そんな状況になって、じわっと効果が上がっています。ですけれども、日本らしいですよ、ふるさと回帰なんて何となく情緒的で。僕は、情緒的なことというのはグローバル時代にはとっててもすてきだと、大事なことだと思うのです。そんな感じでやっぱりもう一回地域から日本を変えて、それで盛り上げていったらもう一回再生するかなということ。時間かかってもらないと、次につながっていかないというふうに思っています。そんなこんなで心を熱くしながら生きています。

簡単ですけれども、時間も押しているようなので、この辺で終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

◇事務局長 大変ありがとうございました。

先生におかれましては、熱いふるさとへの思いと地域活性化について体験的にお話をいただきました。ありがとうございます。高橋先生ただいま大変ご丁寧にご講演をいただきましたが、せっかくの機会でございますので、お一人様ぐらいでございますけれども、質問をお受けしたいと思います。挙手をいただきますとマイクをお持ちしますので、どうぞ挙手をお願いをしたいと思います。

◇参加者 とてもためになる講演どうもありがとうございました。

聞きたいことがあるのですけれども、それぞれ移住してきてやっぱりスローライフというか、生活を楽しんで生きていくためにスローライフという言葉が今ありますけれども、そうすると心のゆとりというみんな定職としないで、食べていけばいいという生活の移住を考えるとと思うのです。その中で税金を払っていない低所得者が、弟子屈とか、いろいろなところに知り合いますけれども、ほとんどそういう人が多いのです。年金も払っていない。そういう人たちについてどう思いますか。

◇高橋先生 わかった。これ霞が関の審議会に行くとみんなこうなっているの。おれさっきよくできているなどと思って。済みません。

それで、そのお話。スローライフというのか、ふるさと暮らし、田舎暮らしというのは、一番大事なことは何かというとだれとどこで何して暮らすかなのです。あこがれだけで田舎暮らしはできない。田舎に行ったら、毎日が日曜日なのです。だから、行く前によくシミュレーションしろというのはそういうことなの。どこでだれと何して暮らすかということ、これが大事。成功する第一歩なのです。それで、私どもがやっているスローライフというのは、もちろん要するにその人が何をテーマに生きるかということなのです。税金払うために生きているわけではないのだから、例えば団塊世代の場合は言ったように年金と退職金を糧にして、それで暮らすと。自分が東京ではできなかった自己実現をしたいと。例えば今みたいな食の安全なんかが危ういときは、せめて田舎で暮らして自然と向き合いながら、自分で食う分ぐらいは無農薬、有機の野菜を自分でつくって暮らしたいという人って多いわけ。うちのアンケートだって6割ぐらいがそういう希望を持っているわけなのです、複数回答で。ということなので、そういうことでいいと思うわけ。何もせずにぶらぶらして人の世話になるなんて、それはそういう人は資格がないわけ。そういうのはほうっておけばいいわけだし、だからそういうのなんか。さっき色川地区の話したけれども、面接すると行ったでしょう。中には不心得者がいるわけ。東京で食えないから、田舎でだと食えるだろうと思って来るわけ。田舎で世話になろうとして、それで生活保護をもらおうとかいうやつがいるわけ。そういう人たちは、やっぱりそっと別のところあるのではないですかという話は必要だということなのです。ということなのですけれども、回答になったかな。

◇参加者 自分たちは楽しんでいるのですけれども、町の財政がやっていけないのではないかという。税金を払えていないという部分で……

◇高橋先生 そうだね。あなたがそういうふうに思ってくれるのはすごく大事なことだね。そうだ、そうだ。でも、それぞれだからね。ただ、要するにでも一番大事なものは、もう一つ大切なことは人に迷惑をかけてはいけないということなのです。だから、要するに失敗する例ってまたあるわけ。東京から来たとか、東京ではこうだとかというのはこれ絶対だめ、そういうやつは。東京風吹かすやつは、大体田舎暮らしする資格がない。やっぱり東京から来たら、地元は地元の策があるから、教えてもらうぐらいの感じでないとだめなのです。私どもは、一応田舎暮らし成功するための10の秘訣というのがあるのです。郷にいれば郷に従えと。人に迷惑かけるとか、地域にうまく溶け込むためにはだれか先達を見つけて、お師匠さんみたいな先生を探せと。だれでもいいのです。小島なら小島さんを私の先生にして、地元の人から彼に教えてもらって、それでしきたりを学んで次にいくとかということ、そういうことというのはあるよねと。そういうことだと思えます。だから、東京だどごみ集めが毎日とか、川崎なんか毎日来るでしょう。

東京23区だと2日に1遍とか、埼玉だと3日に1遍ぐらいしかごみ集め来ないではない。そうしたら、地方に行ったらおれのところに毎日ごみ集めに来ないとかと役場に電話するというのだ。ばかやろうというわけ。だって、こういう空き地とかいっぱいあるわけだから、何もごみ集めなんか、そんなのするわけないわけだ。自分で自家処理でいいではないかと。それは、そうしてやってもらわなくては困るわけだ。それで、おまえ、税金も払っていないくせに何だと。そういうことあるわけだから、それはあなたが言うとおりのそういうのはペケ。

◇事務局長 ほかよろしゅうございますか。

(「なし」の声あり)

◇事務局長 それでは、特に質問もないようでございますので、ここで皆様の温かい拍手で高橋先生にお礼をさせていただきたいと思えます。よろしく申し上げます。どうもありがとうございました。(拍手)

◇高橋先生 時間も関係もあったので、レジュメつくったけれども、余りレジュメに沿わなかったのだけれども、それはまた別途の。後で読んでいただいて、それで情報誌に住所書いてあるから、そこにはがきか何か、メールでも結構ですから、いただければちゃんと対応いたしますので、よろしくどうぞ。ありがとうございました。

◇事務局長 それでは、模擬議会及び講演会の終了に当たりまして、大空町議会議員会、元木副会長からあいさつを申し上げます。

◇議員会副会長 閉会に当たり一言お礼を述べさせていただきたいと思えます。

長時間にわたりまして、午後からですが、皆さんの出席のもと盛会に移住者模擬議会を終わらせることができました。本当にありがとうございました。これらにつきましては、6人の方が先ほども聞かれましたように、それぞれの模擬議員の皆様が体験を通じ、率直に質問をされたのかなど、このように私は実感しております。また、町長側としても熱心にわかりやすく答弁をされることによって、大幅な時間を超えてしまったことになったわけでございます。それにつきましても悪いわけではございません。そして、皆さんの熱意ある質問が町長をこのように動かしたのではないかなど、このように思っております。盛会のうちに終わらせていただいたことにつきましては、皆様のおかげをもって終わらせていただきました。また、講演されました高橋公さんについては、議会の感想を含めながら講演をしていただきましたが、時間の関係も十分ではなかったかなど、このように思っております。また、ここに会場には偶然にも稲城市の市議会の皆様もご参加をいただきましたことに本当にお礼を申し上げたいと思っております。

以上をもちまして皆様の参加をもって盛会のうちに終わらせていただきましたことに感謝を申し上げ、閉会といたします。どうもありがとうございました。

◇事務局長 以上をもちまして模擬議会及び講演会の一切を終了させていただきます。
大変このイベントにご参加いただきましてありがとうございます。これで終了させていただきます。

閉会 午後 5時27分